「てきとうふき」漢字で書けなくても大丈夫

講演	貫名　信行〔ぬきな・のぶゆき〕
講師紹介	同志社大学脳科学研究科教授
研究テーマ	認知症の原因の解明と治療法の開発をめざす

はじめに

私は１９７７年に東京大学（東大）の医学部を卒業し、神経内科医として臨床と教育・研究を行なったのち、１９９７年に理化学研究所脳科学研究センターにグループディレクター、チームリーダーとして赴任、２０１２年順天堂大学脳神経内科の客員教授、２０１５年より同志社大学大学院脳科学研究科教授として勤めています。専門は病態脳科学、脳の病気のメカニズムを解明し、治療につなげていこうというもので、認知症、脳神経難病などを対象とした研究を行なっています。この度はキリスト教文化センターから同志社スピリット・ウィークで講演をということでしたので、最初はスピリチュアルウィークと思っていましたので、坐禅とかやっているから瞑想の話でもしたらいいのかと思いましたが、よくよく読むとスピリット・ウィークでした。ということは同志社精神ということになり、これは私が属している良心学研究センターの方の話をすればいいのかなと思いつつ、過去の講演集を見てみました。２０１８年の講演集のタイトルは「倜儻不羈なる書生ヲ圧束せす」でした。これはなかなか難しい。たぶん普通は読めない。ましてや書けない。というわけで、まずはタイトルを「『てきとうふき』漢字で書けなくても大丈夫」としようと思ったわけです。

さてこの難しい字、字画が多いので書くのも大変ですが、読むためにパソコンに打ち込むのも大変。それでも調べてみると「倜儻」は「てきとう」と読み、才気が優れていること、「羈」はつなぐということから「不羈」は束縛されないということになる。これでサーチするとそもそも同志社の関連のサイトしかほとんど出てこない。同志社大学ホームページの、創始者の教育理念：自由主義のところに「同志社に受け継がれる、倜儻不羈（てきとうふき）という言葉は、才気がすぐれ、独立心が旺盛で、常軌では律しがたいことを意味します。同志社では一方的に指導するというスタンスではなく、生徒の可能性を信じて、個性を大切にし、一人ひとりが自発的に行動して自分の力を発揮できるよう努めてきました。」と説明されています。

こういった同志社に関連した、正確には創立者新島襄に関連した言葉を引用・解説している冊子に良心学研究センターで出している『新島襄３６５』（同志社大学良心研究センター編集・発行　同朋舎　２０１９年）という冊子があります。この本は私も一部書いておりますが、１日一つずつ新島襄の言葉が引用説明してあります。例えば倜儻不羈に関しては良心学研究センター長の小原克博先生が「『遺言（大磯）』から。日常語として『倜儻不羈』を使うことはないが、新島の思想を理解する上で心に留めておきたい最重要キーワードの一つである。『倜儻』は自分の意見をはっきりと言うこと、『羈』は手綱のことであり、『不羈』は手綱で御することができないほどの自由奔放さを意味する。つまり、遺言において新島は、常軌を逸脱するような自由奔放な学生がいたとしても、鋳型に押し込めるようなことはせず、その本性を導き、開花させて欲しいと願ったのである。誰よりも、新島自身が倜儻不羈なる人物であった。この遺言をより直接的に言い換えれば、同志社は倜儻不羈なる学生を育てるべきだ、と読むこともできる。常識の枠にはまっているだけでは、また、既存の社会秩序を遵守するだけでは、社会をよりよいものにすることはできないだろう。東洋思想由来の『良心』は道徳主義的に理解されやすい言葉である。しかし、同志社において『良心』を描こうとするときには、新島襄の冒険的な生涯と、彼が生涯の最後に残した『倜儻不羈』をキャンバスにして、大胆に『良心』を描くべきなのである。」と説明されています。こういった語録は、私たちの世代だと中国の文化大革命の頃、赤い毛沢東語録などを振っていた狂信的なイメージが思い出されるのですが、この『新島襄３６５』はそれほどのことはないと思いますので、ぜひ読まれることをお薦めします。

「ディスレクシア・自閉症」苦手もあれば、得手もある

さて「才気が優れている」ということは何かに優れていることかと、今時どんな人かとネットで調べてみると、「小学６年生でオリンピック２位になった○○少年」というタイトルで、テレビ東京の番組を見つけました。「レベチな人、見つけた」という番組。ディレクターが「世の中に１％くらいしかいないだろう」というレベル違いなすごい人「レベチさん」に密着し、ビートたけしと国分太一にプレゼンするという。レベルの違う人をレベチというらしい。私の時代だとダンチ（段違い）とか言っていたやつだと納得。まあこの少年が数学オリンピックに出場したりしたことはそんな子供もいるだろうと理解できますが、この番組のバックナンバーをみていると、「12歳で作品集を出版し、16歳でプロの絵本作家としてデビュー。子どもの頃から絵を描く時は、『何が起きている』『ここには誰がいる』などと考えて、作品ごとにストーリーを作っていた。もちろんそのストーリーはレベチさんの空想。空想の世界を描くのは好きで得意だが、似顔絵やデッサンなど、リアリティのあるものを模写することが苦手だそう。知的能力には全く異常がないのに文字の読み書きが困難になってしまう『識字障害（ディスレクシア）』を持つレベチさん。見たものが書けないことが原因で、小学６年生の時、不登校になってしまう。しかしレベチさん、東京大学が始めた『異才発掘プロジェクト』（突出した能力のある小中学生を支援）に参加し、見事立ち直る。」（２０２１．４．13テレ東プラス）というのがありました。これはなんか以前聞いた話と同じだなと思いました。全く別の人の話ではありますが、Mackenzie Thorpe（マッケンジー・ソープ）さんという人がいて、一度京都でお話を聞いたことがあります。彼はイギリスの工業都市のミドルズブラで育ち、識字障害で子供の頃苦しみました。しかし、その芸術的な才能を見出され、自信を持つようになったと言います。現在はイギリス識字障害連合（British Dyslexia Association）をサポートしています。ソープさんやディスレクシアのあるレベチの人の話が示唆することは、才能は多様であるということです。もしかしたら、ディスレクシアという障がいがあることが、芸術的才能を発揮する基盤になっているのかもしれません。しかしもしディスレクシアのために自信を失い、いじめにあうなどしてしまえば、その才能を発揮できなかったかもしれません。

最近、ＴＢＳテレビの「ドラゴン桜」という番組（シリーズ２）が放映されていることをご存知でしょう。阿部寛が教師として、東大に受かることは難しくない、ということを実践で示すわけですが、この中でも健太くんという虫の好きなちょっと変わった少年が出てきます。あまりに虫に好奇心を示し、他の子供のいじめにあったりするわけですが、彼の行動は自閉症スペクトラム障がいに特徴的です。Ａ複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的欠陥の存在、Ｂ行動、興味、または活動の限定された反復的な行動様式・情動的または反復的な身体の運動、ものの使用、または会話・同一性への固執、習慣への頑ななこだわり、または言語的、非言語的な儀式的行動様式・強度または対象において異常なほど、きわめて限定され執着する興味・感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味、といった診断基準にあう行動を健太くんが番組の中で示していることは、ご覧になった方はご記憶でしょう。健太くんは数学などにおいては優れた才能を発揮します。

最近では自閉症に関係する分子がいくつも見つかってきており、その多くは神経細胞をつなぐシナプスに関わる分子です。その一つのニューロリギン３という分子の遺伝子に変異を認める家系があり、その遺伝子変異を持つマウスが作製されました。このマウスは社会性においては機能障害を認めるのですが、空間学習においては正常型に比べて機能が上回っていました（Katsuhiko Tabuchi et al Science 318 71 2007）。このような遺伝子異常によって特定の能力の障がいや機能の亢進（通常より上回る）がおこることは、他の遺伝子異常でも見られており、ウィリアムス症候群という病気では視空間認知障害（図形の模写などができない）が見られる一方、過剰な社会性が認められます。

脳の病気一般に見られることですが、中核症状と周辺症状というものがあります。認知症では記憶障害、見当識障害など認知機能障害がその中心的な症状ですが、不眠、幻覚・妄想、鬱、不安、興奮、徘徊などは周辺症状と言われ、周囲の対応やお薬で良くなることがあります。自閉症スペクトラムでも先ほど申しました、社会的コミュニケーション障害や反復的行動、感覚過敏などは中核的な症状ですが、周りの対応によって不安、鬱、興奮などが出てしまいます。後者の症状は周りの対応などが大きく影響するわけです。

私はこの中核症状をもとに自閉症は疾患だと判断しておりましたが、池上英子氏の書かれた『ハイパーワールド―共感しあう自閉症アバターたち』（ＮＴＴ出版　２０１７年）の中に「他人の心を察することができないのは、自閉症の人だけの問題ではなく、定型発達者の人も同じように自閉症の人の心が読めないのだ。そして、相手の気持ちが読めないと心がつながらないと思っているが、それはお互い様ではないか。」という記載を見て、衝撃を受けました。実際自閉症の人たちもパソコンなどを使いネット空間でコミュニケーションを取っているということです。そうすると、中核症状と思っていた社会的コミュニケーションができないということも、いわゆる「健常者」のコミュニケーションが困難なだけで、手段を変えれば可能だということではないでしょうか。

ダイバーシティの思想

ニューロダイバーシティという考え方があります。上記のような自閉症者について、神経学的な違いは必ずしも治療される必要がない、神経学的な違いを持つ人が自分自身の治療についてどんな治療を受けるかあるいは全く受けないかなどをより自由に選択できるようにすることを目指している考え方です（巻末参照（１））。

確かに、医療の論理は認知症になったら認知症を治すべき、ということで研究などは進められていますが、一方、歳をとったら認知症は当然のこととして、治療が困難な現在、どうケアをしていこうか、認知症を持ちながら生きやすい社会を作るという方向で対応しています。これはマジョリティ（多数派）の人がなるような病気であるので、そういった対応が取れるのでしょう。年齢が上になるほど認知症がマジョリティになるので、認知症になるということはマジョリティ内部の問題として共感可能なのでしょう。であるならば、自閉症などの障がいについても同じ視点が可能ではないのか。東京大学先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎氏は当事者研究の視点ということを主張されていて、彼自身が脳性麻痺を持っているために、その機能障害を「治す」ことを強要された経験を背景とした話をされています。脳性麻痺の障害としての歩行困難が車椅子の使用で克服できるように、自閉症者のコミュニケーション障害も補助システムの使用、開発で可能になるのではないか。マジョリティに合わせるようにマイノリティに強要するのではなく、マイノリティの生きやすいシステムを作ることがダイバーシティの基本的な考えではないでしょうか。

この点から新島のダイバーシティに関係する考えを取り上げてみましょう。

「同志社においては、倜儻不羈なる書生を圧束せず、努めてその本性に従い、これを順導し、もって天下の人物を養成すべき事。」（『新島襄３６５』３６３頁）

「もし私がもう一度教えることがあれば、クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払いたい。それができれば、私は教師として成功できると確信する。」（『新島襄３６５』２３６頁）

「諸君よ、人一人は大切なり。一人は大切なり。」（『新島襄３６５』２５０頁）

これらの新島の言葉を読むと、新島の倜儻不羈は決して成績がいいとかいったレベルの才気に優れていることではないことがわかります。新島自身が国禁を犯してアメリカに密出国した倜儻不羈な人物です。おそらく、新島はその自分を受け入れたアメリカの社会の考え方、キリスト教の考え方に影響され、上記の考えに基づく教育を行う同志社を目指したのでしょう。

私はこのアメリカの懐の深さ（トランプ政権下ではそれがなくなってしまったが）の影響を別の人にも見ることができると思います。鶴見俊輔氏（１９２２―２０１５）はハーバード大学出身の哲学者で、代表的な文化人の一人といわれていました。一方で「11歳の頃、不良化し、近所の子供たちと万引き集団をつくって本や小物の万引きを繰り返し、家の金を持ち出し、小学校をサボって映画館に入り浸り、歓楽街に出入りして女給やダンサーと交際、肉体関係を持つなどした。12歳の頃にはうつ病になり、睡眠薬を飲んで道路に倒れる自殺未遂を繰り返し、精神病院に３度入院」（巻末参照（２））したような少年非行を行なった人物でもあり、いわゆる「サイコパス」の因子を持っていた可能性もあります。このような人物がアメリカでその能力を開花させ帰国、１９６１年、同志社大学文学部社会学科教授となっています。１９７０年、大学紛争での警官隊導入に反対して同志社大学教授を退職しましたが、彼はもし留学せず日本に居続けていればおそらくただの不良で終わっていたでしょう。こういった人材を育て上げる懐の深い大学に同志社はなるべきではないでしょうか。

最後にゲノムのダイバーシティについて考えてみましょう。コロナ禍はまだ収まりをみせませんが、その一つの原因が変異株の出現です。ウィルス側の立場に立ってみれば、患者数が増えて、ウィルスとしての増殖の頻度が増えれば増えるほど、突然変異の頻度も増えます。したがって、できるだけ抑え込まない限りはワクチンの効果を乗り越える株が出てくる可能性もあります。もっとも、こういったウィルスの遺伝子の変異の大多数は増殖に大きな影響を与えるものではないものだろうと思われます。増殖を困難にする遺伝子変異が起これば、その変異株は消失するでしょうし、従来型より増殖率が高いウィルスが出現すれば、その変異の頻度は多数派となっていきます。ただ増殖と直接関係のない遺伝子変異も起こっており、増殖率の高い変異と挙動を共にしたり、あるいは症状の軽い患者群の中で静かにその変異を維持していることもあるでしょう。人を含む生物全体の進化においても、このような遺伝子変異が起きているわけですが、その大部分は進化にとって中立的なものだという理論が中立進化論と言われ、木村資生氏によって提唱されたものです。たとえば、ビタミンＣは必須物質であり、その生合成酵素を失うと欠乏症になることになるのですが、環境から十分摂取できれば、問題はないというように、条件によって遺伝子変異が中立化します。詳しくは『良心から科学を考える―パンデミック時代への視座』（同志社大学良心学研究センター編　岩波書店　２０２１年）の私が書いた項目「優生思想から脳とゲノムの多様性へ」を参考にして欲しいですが、人類は疾患を引き起こすような変異も中立化することが医療の進歩によって可能になってきています。一方で、医学の進歩は出生前診断と胚操作によって遺伝子の選択を可能とする技術を手に入れています。これは形を変えた優生思想、優生行為ですが、これに対峙する反優生思想は確立できるでしょうか。これは今後の重要な課題だと思います。

本日の講演では「てきとうふき」という言葉から、少し話を広げてニューロダイバーシティ、ゲノムダイバーシティをめぐる現代的課題についてお話ししました。「倜儻不羈」が読めなければ、ちょっとディスレクシアの人の苦労がわかりますが、最近ではコピペしてネットで読み方を見つけることができるでしょう。「てきとうふき」が書けなければ？大丈夫です、これもネットに出てきます。その理由は同志社関係者が書いた文章があるからです。この同志社だけの一見ローカルな言葉に見えるものを、現代的課題であるダイバーシティの思想のシード（種）として世界に羽ばたかせることができることを祈っております。

〔参考文献〕

１　「ニューロ・ダイバーシティ」『フリー百科事典　ウィキペディア　日本語版』
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%AD%E3%83%BB%E3%83%80%E3%82%A4%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%86%E3%82%A3　２０２１年６月９日アクセス
２　「鶴見峻輔」『フリー百科事典　ウィキペディア　日本語版』
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%B6%B4%E8%A6%8B%E4%BF%8A%E8%BC%94
２０２１年６月９日アクセス

２０２１年６月９日　同志社スピリット・ウィーク春学期
オンラインによる「講演」記録